

平成 30 年度 第 1 回卒論中間発表会およびレポート執筆に向けて

1. 第 1 回卒論中間発表会

- ・趣旨：卒論の大きな方向性を見定めることが目的。自分の関心のある研究テーマを示して、それに関する研究動向を把握し、今後の研究対象絞り込みに向けての見通しを示す。
 - ・対象者： 平成 30 年度（平成 31 年 3 月）に卒業予定の学生（現 3 回生以上）
 - ・日程： **2017 年 11 月 30 日（木）・12 月 1 日（金）（予定）**
 - ・発表時間： 30 分（発表 10-15 分、質疑応答 15-20 分）
 - ・場所： 文学部中庭会議室（1 日目）／文学部本館 2 階大会議室（2 日目）
- * 発表会全体への参加は義務であり、授業以外の理由による欠席は認められない。特別な事情で、発表日時調整が必要な場合はすぐに申し出ること。

《卒論中間発表会にむけての準備・提出物》

- | | |
|----------------------------|------------------------------|
| (1) 発表題目の提出期限（発表会 2 週間前） | 2017 年 11 月 17 日（金）17:00 まで。 |
| (2) 報告レポートの提出期限（発表会 1 週間前） | 2017 年 11 月 24 日（金）17:00 まで。 |

※締切厳守で！！

《今後のスケジュール》

平成 29 年度末	指導教員との個別相談
平成 30 年 5 月中旬～6 月上旬	第 2 回卒論中間発表会：研究対象確定、仮説提示・検証
10 月下旬～11 月上旬	卒業論文題目提出期間
10 月下旬～11 月上旬	第 3 回卒論中間発表会：卒論の章立てにもとづく発表
平成 31 年 1 月初旬	卒業論文提出期間
1 月下旬～2 月上旬	卒業論文口頭試問

2. レポート、レジユメの体裁

《レポート》

- ・分量 3,000 - 4,000 字程度（400 字詰め原稿用紙換算で 8 枚程度、多くても 10 枚程度）。

- ・体裁 A4 サイズ・横書き・1 頁あたり 40 字×25 行を目安にしてください。
- ・内容 発表会の趣旨を踏まえ、以下の点に留意して作成してください。
 - (1) 問題関心・研究テーマ
 - 自分の抱いている学問上の関心・疑問を提示する
 - 問題関心との結びつきを明確にしつつ、対象とする地域・時代・研究テーマを提示
 - (2) 時代背景
 - (3) 研究史（先行研究の紹介）
 - 研究テーマに関してどのような研究が行われてきたか整理する
 - ※単なる羅列・紹介ではなく、自分の問題関心に従って批判的に検討する
 - (4) 研究計画
 - ①研究対象についての見通し
 - 今後取り上げる研究対象についての現時点での見通しを説明する
 - ②入手・閲覧可能な一次史料・二次文献（欧語含む）の見通しなど
 - 単に羅列するのではなく、その史料・文献がなぜ必要なのかを説明する
 - (5) 参考文献一覧
- * 作成・提出にあたっての注意事項
 - (1) 表紙、本文、参考文献一覧の順番に並べ、最終頁まで頁番号をつけること。
 - ※頁番号は本文からはじめる。
 - (2) 表紙に発表題目、名前、所属、学年、学籍番号を明記すること。
 - (3) 参考文献一覧には、参考文献と予定参考文献とをそれぞれ分類して書くこと。
 - またそのさいには、日本語文献と外国語文献とを分けて書いてください。
 - (4) レポートは手書きでなく、パソコンで作成し、**各自 4 部**を用意したうえで左上をホチキスで留め、提出すること（コピーは公費）。

《レジュメ》

第 1 回卒論中間発表会で配布するレジュメは、レポート同様、以下の点に留意して作成してください。

- (1) 問題関心・研究テーマ
 - (2) 時代背景
 - (3) 研究史（先行研究の紹介）
 - (4) 研究計画：①研究対象についての見通し、②入手・閲覧可能な史料・文献の見通し
 - (5) 参考文献一覧
- * **各自 40 部**ずつ用意してください（コピーは公費）。
 - * 必ず発表会開始前にコピーを終えておくこと。

3. 参考文献の表記法について

《日本語文献》

- ・ 著者名、論題、編著者名、書名、出版社、出版年、頁（論文の場合）。
- ・ 論題には「……………」、書名には『……………』を使用する。

(単行本)

- (1) 井上文則『軍人皇帝のローマ——変貌する元老院と帝国の衰亡——』講談社、2015年。
- (2) ジャック・P・グリーン（大森雄太郎訳）『幸福の追求——イギリス領植民地期アメリカの社会史——』慶應義塾大学出版会、2013年。

* 翻訳の場合は、(2)のように著者名の後ろに訳者名を括弧でくくって表記。

* 出版社と出版年を括弧でくくって表記する場合もある。

例) 井上文則『軍人皇帝のローマ——変貌する元老院と帝国の衰亡——』（講談社、2015年）

(学術雑誌所収論文／単行本所収論文)

- (1) 春日あゆか「イギリス産業革命期の煤煙対策——1820年代リーズにおける言説対立の始まり——」『西洋史学』第262号（2016年）、1-19頁。
- (2) 北村陽子「世界大戦の記憶——フランクフルト・アム・マインの戦争記念碑——」若尾祐司・和田光弘編『歴史の場——史跡・記念碑・記憶——』ミネルヴァ書房、2010年、307-324頁。

《外国語文献》

- ・ 以下に挙げるのは英語文献の例だが、英語以外の文献表記には異なるルールがある。
- ・ 書名はイタリックで表記すること。
- ・ 論文のタイトルには‘ ’をつける。またフランス語文献やドイツ語文献ではそれぞれ異なった表記法、《》や„ ”がある。

(単行本)

- (1) Holger Hoock, *Empires of the Imagination: Politics, War, and the Arts in the British World, 1750-1850*, London, 2010.
- (2) Cannadine, David (ed.), *Empire, the Sea, and Global History: Britain's Maritime World, c.1763-c.1840* (Basingstoke, 2007).

* (2)のように、著者・編者の姓と名を逆転して表記することもある。

また、出版地・出版年を括弧でくくって表記することもある。

*** 表記法は文献リストのなかで必ず統一すること。**

(論文)

- (1) Bob Harris, “American Idols’: Empire, War and the Middling Ranks in Mid-Eighteenth-Century Britain”, *Past & Present*, 150 (1996), pp. 111-141.
- (2) Colley, Linda, ‘Britishness and Otherness: An Argument’, *Journal of British Studies*, xxxi (1992), pp. 309-329.
- (3) Patrick O’Brien, ‘Inseparable Connections: Trade, Economy, Fiscal State, and the Expansion of Empire, 1688-1815’, in P.J. Marshall (ed.), *The Oxford History of the British Empire II: The Eighteenth Century* (Oxford, 1998), pp. 53-77.

* (1)、(2) の網掛け部分は、イギリス式とアメリカ式の違い。

* (3) は論文集に収められている場合の表記の仕方。

* 学術雑誌の巻数は、アラビア数字で 15 でもローマ数字で xv、XV と表記してもよい。

4. 文献調査の方法

- ・既読文献の参考文献や註をいもづる式に探すのが効率的。
- ・外国語文献の調査方法や入手方法は〈参考資料 1〉に記しているが、自分の関心のある分野を専攻している教員や院生に尋ねるとよい。
- ・OPAC や CiNii など、インターネットを利用すればかなりの情報収集が可能（詳しくは資料を参照）。ただし集まった情報の内容や質はかなり玉石混淆になるため、十分な注意が必要。
- ・西洋史学研究室の HP には、大阪大学で利用可能な電子ジャーナルのリストが掲載されているので参考に（URL=<http://www.let.osaka-u.ac.jp/seiyousi/info-3-1-1.html>）。
- ・西洋史学研究室には、下記のような論文・レポートを書く際に参考になる図書を常備しているので、適宜参照してもらいたい。

井上浩一『私もできる西洋史研究——^{ヴァーチャル}仮想大学に学ぶ——』（和泉書院、2012 年）

ウンベルト・エコ（谷口勇訳）『論文作法——調査・研究・執筆の技術と手順——』（而立書房、1991 年）

斉藤孝・西岡達裕『学術論文の技法 新訂版』（日本エディタースクール出版部、2005 年）

大学の歴史教育を考える会編『わかる・身につく 歴史学の学び方』（大月書店、2016 年）

歴史科学協議会編『卒業論文を書く——テーマ設定と史料の扱い方——』（山川出版社、1997 年）

5. さいごに……

わからないことは先生方や先輩に聞けば教えてくれるので、遠慮せずに研究室にどんどん来て、先生方や先輩たちと話をし、質問してみるといいです。研究を進める上で人と議論することは非常に大切です。

《その際の注意事項》

- (1) 教員に相談を希望する場合は「オフィス・アワー」を利用するか、事前にアポイントをとってください。院生も自分たちの勉強時間をさいて協力してくれているということを忘れずに。勉強の途中であれば、「今、いいですか？」と尋ねる心遣いをしてください。
- (2) 教員や院生に相談する場合は、最低限の準備や勉強をしてから臨んでください。「ネタをください」、「どうすればいいですか」など、丸投げは禁物です。頑張って勉強してください。

〈参考資料 1〉

I. 文献調査と入手について

1. 日本語文献

- (1) 単行本・学術雑誌論文全般：研究入門書巻末の文献一覧。
- (2) 単行本：OPAC や CiNii Books 等を利用して図書館などで探す。
- (3) 学術雑誌論文：『史学雑誌』の「文献目録」「回顧と展望」、『日本歴史学界の回顧と展望』、『西洋史学』の目録などを利用する。また、Magazine Plus や CiNii Articles のようなオンライン・データベースを検索するのも有効。

2. 外国語文献

- ・単行本・学術雑誌論文全般：阪大図書館 HP のディスカバリーサービスから、単行本と論文の検索ができる。阪大に所蔵している、あるいは阪大学内から閲覧可能な文献の情報も得られる。また、各種研究入門書の巻末には、分野ごとに文献が整理されており参考になる。西洋史学研究室 HP 掲載の「文献の探し方」(URL= <http://www.let.osaka-u.ac.jp/seiyousi/info-3-1.html>) も参照。
- ・学術雑誌論文：阪大図書館の電子リソースリストから、阪大学内で閲覧可能なオンライン・ジャーナルなどを検索することができる。学生であれば館外からも Web サービスにログインすることで利用可能。
URL= <http://sfx.usaco.co.jp/osaka/az>
- ・西洋古代史の文献・雑誌・データベースについては、西洋史学研究室 HP に掲載している「卒論執筆のための古代史関連ツール」(URL= <http://www.let.osaka-u.ac.jp/seiyousi/info-3-4.html>) を参照すること。
- ・イギリス史・イギリス帝国史の文献検索では、**Bibliography of British and Irish History** が網羅的なデータベースとして活用可能。学内限定ながら阪大図書館のデータベースからアクセス (URL= <http://apps.brepolis.net/bbih/search.cfm?>)。また、英国図書館 (British Library) のカタログや COPAC を使って文献を探す方法もある。

Explore the British Library:

URL=

http://explore.bl.uk/primo_library/libweb/action/search.do?dscnt=1&dstmp=1446439871004&vid=

BLVU1&fromLogin=true

COPAC: URL= <http://copac.jisc.ac.uk/>

- ・ アメリカ史の文献については、*Journal of American History* や、*American Historical Journal* のウェブサイト（阪大内で利用可）から索引を検索するのがお薦め。
- ・ ドイツ語の論文については、*Historische Bibliographie* からドイツ史の各種論文について調べることができる。また、*Historische Zeitschrift* 掲載の論文は、同雑誌の Register で検索可能。Register は5年に一度刊行される。オンラインでは以下のウェブページから最新号とバックナンバーの目次が見られる。
URL= <http://www.degruyter.com/view/j/hzhz>
- ・ フランス語の文献にかんしては、日本の CiNii に相当するもので、未公刊の博士論文に関しても要約をすることができる。URL= <http://www.sudoc.abes.fr/>
また BNF（フランス国立図書館）では、最近、主要な一次資料のデジタル化が進み、ネットで一部の本や新聞雑誌記事を読むことが可能らしい。URL= <http://www.bnf.fr/>
- ・ 各雑誌の「書評」や Book Reviews のコーナーで最近の研究書を確認する方法もある。

* 外国語雑誌が研究室や学内の他の部局になく、かつオンライン・ジャーナルを利用できない場合は、図書館の参考調査カウンター（日本で所蔵されているかどうかは、CiNii Books もしくは『学術雑誌総合目録』）で調べてみることに。

3. 文献の入手方法

阪大が所蔵していない文献の場合、他の大学の図書館にあるかどうかを調べる。あれば、図書館2階にある参考調査カウンターや Web サービスを通じて貸出、もしくは複写を依頼する。貸出・複写いずれも不可の場合、参考調査カウンターで手続きの上、所蔵機関を直接訪問して閲覧する。

II. 論文とは？

（鈴木雄雅『大学生の常識』（新潮社、2001年）より）

1. 論文

①論点や問題点の提起がなされ、自己の創意から出た仮説を事実によって論述し結論を引

き出すもの。

②一定の形式を備え、かなりの分量を有し、各方面からの批判を加味して書き上げられたもの

* 阪大西洋史学専修の卒論は 400 字詰め原稿用紙換算で 50 枚程度
(註、参考文献、巻末資料を除いた本文のみの分量で)。

③学術論文とは、自分の研究の結果を論理的な形で表現したもの。

2. 研究論文の資格のないもの

①一冊の書物や一篇の論文を要約したものは、研究論文ではない。

②他人の説を無批判に繰り返したものは、研究論文ではない。

③引用を並べただけでは研究論文ではない。

④他人の業績を無断で使ったものは、“剽窃”であって、研究論文ではない。

3. テーマの見つけ方

(1) 興味の対象を明確にする。

(2) 問題点を探す。

①通説の誤りを見いだす。

②通説で欠けているところを見いだす。

③通説に何かを付加する。

④新しい解釈をする。

(3) 焦点を絞る。課題から本題へ。教員にぶつかろう (物理的にではない)。

4. 自分の扱う論文のトピックを確定する前に

(1) このトピックの研究に必要な材料があるか。

(2) 自分の力で扱いきれるか。

(3) 新しい研究トピックであるか。

(4) 自分はこのトピックに興味関心を持っているか。

(5) 意義のある研究トピックか。

5. テーマは細かくしぼること

自分がその研究のために、情熱を燃やすことのできるテーマ、自分のエネルギーを注ぐに値するようなテーマを選ぶことが大切。

(1) 自分のテーマに関連する分野の学術雑誌に早くから親しんでおくこと。

(2) 教師の指導を受けること。

(3) 大学の卒業論文のテーマを過去にさかのぼって研究すること。

(4) テーマを選んだ根拠をはっきりさせること。

6. 文献の精読

- (1) まず概説書の「注」や「参考文献」にあげられている文献に注目。
- (2) 次に、専門書に当たれ。
- (3) 最後に論文を読め。
- (4) 雑誌も馬鹿にできない。

→最終的には註をつけることを考慮し日頃からデータを PC やカード等で整理しておくこと。

7. 必ず原典に当たること

引用されているものは「孫引き」せず、必ず原典に当たれ。

二次文献から安易に引用するな。

安易に図表などを「孫引き」するな……数値やデータはその著者が解釈して図表化したものであるから、論述と展開が異なれば意味も違ってくる。できるだけ原資料に当たれ。

8. 資料の信頼性

- (1) 資料の出所を確かめること。
- (2) 論旨に飛躍はないか。

1. 大切なのは、論文全体がわかりやすく書いてあり、構造的に組み立てられていること。
2. 横道にそれて、なにが幹なのか分からなくなるとはいけない。
3. 話の筋道が明確でなければならない。
4. 論文は主張や意見の明示されたものでなければならない。
5. 冷静な表現でなくてはならない。理路整然と真面目な文章でなくてはならない。
6. 結論に至る経過が明らかでなくてはならない。
7. 冗漫や過度の修飾語はいらない。

9. 一般的注意

- (1) 文字は辞書に当たれ。
- (2) 俗語、卑語をつかうな。
- (4) 修飾語はなるべく使うな。
- (5) みだりに線や傍点をつけるな。

10. 論文の文章でつねに次のことを頭におけ。

- (1) 読む人（読者）がいる。
- (2) 自己の主張を明確に。一つでも、二つでもどこかに“独創性”の光を放て。
- (3) 説得力のあるものを。
- (4) できるだけ凝らないで、自然のままの文章を書く。
- (5) 難解な言葉は出来るだけ少なくし、いま世の中で使われている言葉を使うようにする。
- (6) できるだけ使える言葉の数を多くする。
- (7) 文章のテンポは短く、書き方に工夫を凝らす。
- (8) 山場はどこか。結論が先か、結論があとか。
- (9) 余韻を残す文章を。→この意見には賛否両論あり。注意。

卒業論文審査基準

大阪大学文学部西洋史学専修

I. 基準の骨子

- 1) 卒業論文の目的は、本専修の教育目標に則り、
 - ①批判的思考能力の涵養
 - ②外国語能力の養成に置き、これを充足しているか否かを審査の基準とする。
- 2) 個別指導を充実する。
- 3) 本基準は、卒業論文合格の最低限基準であり、学生はこれを越える論文を作成するよう努力することが望ましい。
とくに大学院進学を考える学生は、この点に十分注意することが必要である。

II. 批判的思考能力に関する基準

これを以下の5点に分けて審査する。

- ①問題発見能力
- ②情報収集能力
- ③情報分析能力
- ④総合力
- ⑤表現能力

①問題発見能力の基準

論文のテーマを明確に定式化できているかどうか。

仮説自体は独創的なものでなくてもよい。

そのテーマがなぜ論文に取りあげる必要があるのかが説明できているか。

これを述べるためには、ある程度は研究史に立ち入らざるをえない。

②情報収集能力の基準

設定したテーマを論じるに必要な文献を調査・収集しているか。

◆史料の使用は絶対条件とはしないが、使用することが望ましい。

外国語文献については、下記のⅢを参照のこと。

③情報分析能力の基準

仮説の論証に向けて脇道に逸れずに、収集された事実を分析しているか。

事実の分析に、独断や知識不足に基づく飛躍や陥穽はないか。

④総合力の基準

論文が全体として、仮説の論証という方向に沿ってまとまっているか。

⑤表現能力の基準

文意が通っているか。全体の論旨が通っているか。

自分の文章と、既存研究文献の文章の区別がついているか。

必要な注が付されているか。

概念を使用する場合、それを十分理解しているか。

論文中の表記に関しては、口頭試問でこれを確認することがある。

Ⅲ. 外国語能力の養成に関する基準

外国語文献を書籍1冊（あるいは、論文5本程度）以上利用しているか。

非英語圏国の歴史をテーマとする場合、当該国語文献の利用は絶対条件としない。

◆ただし、当該国語文献の利用はきわめて望ましい。

外国語文献の利用を確認するため、口頭試問でこれに関する質問をすることがある。

Ⅳ. 卒業論文中間発表の日程

1) 3年生12月ごろ

問題設定について発表する。

発表約10-15分、指導約15-20分

2) 4年生5月ごろ

事前にレポートを提出し、当日はそれにもとづいて発表する。

発表約20-25分、指導約15-20分

3) 4年生10月ごろ

事前にレポートを提出し、当日はそれにもとづいて発表する。

発表約20-25分、指導約15-20分